

## 地方再生への取り組み ～島根県海士町<sup>あま</sup>の挑戦～

海士町町長 山内道雄さん

実施日 2007年8月9日

### 海士町概要

島根県 隠岐郡 の町。隠岐諸島の一つ中ノ島にある一島一町の町で、後鳥羽上皇が流された島としても知られ、多くの歴史的文化遺産が残る。

### インタビューの趣旨

地方再生に熱心に取り組む地域として、日本海に浮かぶ自然豊かな隠岐諸島の一つ「中ノ島」、島根県隠岐郡海士町にうかがいました。2003年から国の規制緩和政策の一つである特区（構造改革特別地区）を利用し、地方再生に取り組む町の姿を追ってみました。



海士町から日本海をのぞむ

### ■島の素材をブランド化

——海士町は、特区と地域再生計画を組み合わせた地域再生に取り組んでいらっしゃるのですが、特区の申請をされた経緯について教えてください。

平成の大合併のなか、海士町は合併をしないという選択をしました。そのなかの大きな戦略として、守りの戦略と攻めの戦略を立てました。



海士町 町長の山内道雄さんに、行政の取り組みについてお話をいただく

守りというのは、行財政改革を行うことです。まずは私をはじめ、職員の給与をカットしました。人件費の占める割合が非常に高いわけですから。私は、50%カット。職員は5%回復させましたが、全国的に見ても、まだまだカットの割合は高いですね。課長、係長は23%です。当時、始めたときは30%でしたが、現在23%。全体で平均して16%くらいです。今では、財政が落ち着いてきたので少しずつ回復してきましたけど。攻めの戦略としては、地域にあるものを活かして産業を興し、

雇用の場を生んで人口減少を防ぐことです。そのための特区であり、地域再生なんです。

地域再生ということでは、島をまるごとブランド化しようと考えています。「サザエカレー」や「岩ガキ」などが代表的ですが、地域産業の活性化として支援を受け、島にある全てのものを活用して、海士町に来れば何でも揃うデパートのようにしたいんです。海士の暮らしの中で育まれた技術や文化、島の特産品を全国に紹介していければいいなと思っています。

建設業から農業に参入できるようにするため、特区申請をし、平成16年3月に国より「潮風農業特区」の認定を受けることができました。年々公共事業が減っていくこともあり、建設業の方は農業への参入に熱心に取り組んでくれました。私たちはそれを支援するために、農家の方の土地を町が借り上げ、それを企業に貸し付けるという形をとりました。

もともと隠岐では繁殖牛を飼っていて、生まれた子牛を三重の松阪や岡山の肥育業者に出荷するというのをやっていた。しかし、海士で肉牛にまで肥育し、「島生まれ、島育ち」の隠岐牛というのをブランドにしようと考えついたわけです。建設業からの農業への参入によって、牧草地開発など様々な面で効果があがっています。今では、島全体に牛を飼うという傾向があり、これは海士町だけでなく、ほかの島にも波及効果が出ています。

島には、農業と漁業しかありませんから、島にあるこれらのものを最大限に活かして生きたいと思っています。漁業関係では、「CAS凍結センター」という施設を設立しました。



**まぼろしの牛として地位を確立しつつある隠岐牛。豊かな自然が良い牛を育てる**



**新たな名産として人気の「サザエカレー」を食す。コリコリとした食感が新鮮**

隠岐周辺の海域では、白いかなどの新鮮な魚介類が豊富に獲れるのですが、離島ですから市場に届くまでに時間と費用がかかり、その分、商品の価値が落ちてしまうというハンディがどうしてもでてきます。CASというシステムでは、細胞や組織を壊すことなく、凍結ができるので、解凍しても鮮度を蘇らせることができます。このセンターの設立によって、商品の価値を損ねることなく、大消費地に出荷することができるようになりました。

## ■大規模市場での評価

——特区認定と地域再生に取り組まれてからの変化について教えてください。



隠岐牛の肥育場

海士町ではこの隠岐牛をブランド牛として、東京の市場へ出荷するようになりました。このほかにも岩ガキや白いかなどの海産物も東京の築地市場に出荷しています。なぜ、わざわざ東京の市場に出荷するのかというと、東京の市場は厳しいけれど、よいものであれば、商品価値を認めてもらいやすいし、影響力も大きいからです。県からも「なぜ東京なのか。大阪もあるんじゃないか」など、いろいろ言われたんですが、私はやっぱり東京じゃないと、という思い

がありました。あえて厳しい東京の市場へ出荷することで、ブランド牛としての価値を高めていきたいと思っています。まだまだ松阪牛などのブランド牛には量的に追いつきませんが、市場からは頭数をもっと増やして欲しいという嬉しい要望が出てきているんですよ。品質的に良いと認めていただけたのだと感じました。隠岐のような島は、肉牛を育てるのに適しているといわれています。アップダウンが激しい丘陵地が多いので、放牧すると自然に牛の足腰が強くなってきますし、また潮風を浴びた牧草を食むこともいいらしいです。今後は、質を維持して、頭数を増やしていくことが課題です。

特区認定によって、農業はずいぶんと変わりました。牛の飼育が中心という点は変わらないのですが、土木現場から発生する伐開木（工事で発生する木くず）のチップと牛の糞尿を使って良質な堆肥を作ることで、島で自給できる循環型の農業の仕組みが構築されました。堆肥が変わってくると、ほうれん草などの葉ものの野菜のできも変わってきました。これらは市場に出荷しても、とても高い評価をいただいています。



「ターン」で牧場の仕事に取り組む人々

## ■新たな島の担い手

——新たに島にいらっしゃったIターンの方について教えてください。

このように産業を興してきた結果もあるのですが、16年度から18年度の3年間で78世帯、145の方が移り住んできました。昭和25年の人口ピーク時には、約7000人が暮らしていましたが、以降年々減り続け、現在は2400人くらいになってしまいました。それに対して、3年間で145人の増加というのは、他の地方の過疎地域と比べると驚異的な増加率だと思います。



和歌の達人、後鳥羽上皇が流されたとされる地

現在、海士町での求人はインターネット上で公開しています。求人の応募のほとんどは、Iターンの方です。Uターンの方は少ないんですよ。積極的にIターンの政策をしているわけではありませんが、やはり田舎暮らしや自然に魅力を感じて来られている方が多いのだと思います。Iターンされた方の中にも、畜産の経営に携わり、新たに牛を飼われる方もいるのです。これから徐々に人口構成比が、若い年代にシフトしていくと思います。この傾向は、町として歓迎すべきことです。

島にやって来た方々は、いろんな場所で働き、活躍しています。今の主な仕事は、漁業や森林関係ですが、仕事の面だけでなく、新たに来てくれた方々の発想力が島の成長を支えていると感じます。現在、島では体験ツアーなども行っているのですが、田舎や自然に興味を感じている若い方に、ぜひ参加してもらい、島のよさを実感して欲しいですね。

## ■島の展望と期待

——今後の目標や取り組みについて教えてください。

「海士町デパートメントストアプラン」を進めるために、さまざまな産業を興し、商品化を進めていきたいと思っています。いかに商品拡大し、販売力を高めていくかが、私の一番の仕事ではないかと考えています。販売力を高め、売上を伸ばすことが、雇用の創出と島の活性化につながります。島の魅力や価値を高め、それらをさらに多くの人々に知ってもらえるよう取り組んでいきたいです。